モロッコの村落開発と在仏移民 NGO
――M&D の事例――

宮　治　一　雄

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．M&D の沿革・組織・活動
Ⅲ．プロジェクト・サイトの概要
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．はじめに

「移民と開発 Migrations et Développement」（以下 M&D と略称）という名称の NGO（非政府組織）が南フランスのマルセーユにある。これはフランスに在住するモロッコ人移民が結成した NGO であり，移民の出身地であるモロッコ僻地の山村で村落開発に従事している。私が M&D の活動を知ったのは，モロッコ人研究者が1997年に刊行した２冊の書物を通じてであった。第一は F. メルニッシーの『上アトラスのアイト・デブルイユ』［Mernissi　1997］，第二は，Z. ダウードの『両岸のモロッコ人』［Daoud 1997］である。この二つの書物は，アプローチは異なるが，同じように M&D を対象としていて，同じような問題関心から出発している(注1)。

同じような問題関心とは，簡単にいえば，移民労働者に対する受け入れ社会フランス，送り出し社会モロッコに共通する厳しい評価を，M&D を通じて再評価するということである。すなわち，移民とは，フランス側からみると，「多くの子供を抱え，問題の多い郊外の劣悪な住まいに住む貧困層」であり，モロッコ側からみると，「個人的利得のために村を出て立派な家や自

動車を買い，休暇でないと村に帰らない放浪者」であった［Daoud　1997］。フランスとモロッコという地中海の両岸に属しながら，フランスでは軽蔑されモロッコでは妬みの対象になっているというように，両岸の社会から同じように拒絶されていたのが移民労働者であった。ところがM&Dの組織と活動を通じて，受け入れ社会フランスでも新しい地位を獲得することができ，送り出し社会モロッコでも新しい役割を確認することができた，というのである。このような「現代のおとぎ話」［Mernissi　1997］に二人の女性研究者が感激してM&Dの成功談を夢中になって書いている，というのが２冊の書物に共通する点である。

在外研究の機会が1999年度後半に与えられた際，フランスにおけるマグレブ研究の拠点エクサンプロバンスの「アラブ・イスラム世界研究所」（IREMAM）に籍をおいて，「マグレブ三国における民主化と社会運動」に関する研究課題に取り組んだが，新しい社会運動として私が着目したのはNGOであり，マグレブ三国での現地調査にあたってはNGOに焦点をあてようと考えていた。上述の著書の影響で，モロッコについてはM&Dを中心として取り上げ，プロジェクト・サイトを訪問して二人の著者の記述を現地で検証しながら，インタビューと観察によって私なりの補足を試みたいと考えたわけである。現地訪問に先立ってマルセーユのM&Dを訪問して資料を収集するとともにプロジェクト・サイト見学の斡旋を依頼した。南部モロッコ，タリウィーン周辺の代表的サイトを選んでほしいという私の希望によって，Ⅲで述べるようにイムグーン，イフリ，アザガルンリスという３つのサイトを訪問できるよう手配してくれた。第４のサイト，アイトイクテルについては，M&Dのモロッコ支部長をしたこともある旧知の人類学者アマハーン（Ali　Amahan）氏に依頼して見学旅行の準備をしていただいた。サイトを訪問したのは1999年11月20日から27日にかけてであった。本稿はフランスでの文献調査とモロッコでの現地調査の結果であり，ⅡでM&Dの沿革・組織・活動について述べた後に，Ⅲで見学したプロジェクト・サイトの概要を記し，最後にⅣで両者を総合した考察の結果を述べることとしたい。

Ⅱ．M&D の沿革と活動概要

１．M&D の沿革

モロッコにおける外国移民の歴史は第一次大戦にさかのぼるが，アルジェリアよりは遅れて1970年代年以降，フランス，オランダ，ベルギーなどへの大量移民が開始された。1973年のオイルショックによってヨーロッパ経済が打撃を受けたために，失業者の増大から各国とも移民の流入を制限しはじめたが，低賃金の移民労働者への需要はヨーロッパ各地で根強いものがあった。またモロッコ側でも失業と低所得という条件があるために移民供給は増加し続けた。モロッコからの移民総数は1992年には182万人（合法労働者のみ）に達しているが，そのうちフランスが72万人で第一位を占め，20万人に達しないオランダ，ベルギーなどを大きく凌駕している。移民の出身地は北東部や南東部などの山地の貧困地帯であり，当初は未熟練な中年の農民が主体であったが，やがて教育を受けた青年たちも雇用機会と輝かしい未来を求めて渡欧するようになった［Chattou　1998］。

M&D の設立者であるジャマル・アルフサイン氏（Jamal Lhoussain，以下ジャマルと略記）は，南東部の移民排出地の中心であるスース地方の寒村イムグーン（タリウィーンの近く）に生まれ，モロッコで工業高校を終了してから1970年に17歳で電気工としてフランスにわたり，アルプス地方のアルジャンティエールで化学工場ペシネーの下請け会社に就職した。当初から労働運動に加わり，フランス人主体の労働組合が実施していた移民労働者との連帯行動に積極的に参加した。1985年に左翼政権が移民労働者の帰還を促進するために帰国奨励金の給付をはじめたが，帰国にあたって移民労働者の再適応の障害となったのは，出身地があまりに貧しく生活条件が劣悪であることであり，出身地での社会的地位も失っていることであった。ジャマルが，帰国を控えた同郷の労働者と話しているうちに，奨励金の一部を拠出し合って出身地の生活を改善するようなプロジェクトを実施したらどうか，という着想がえられたのだという。ジャマルは，労働運動を通じて養った人間関係を生かしてフランス人やモロッコ人労働者に働きかけて，86年に M&D（当

初の名称は「帰国と開発 Retour et Développemet」）を設立し，92年から本格的にモロッコの村落開発プロジェクトを実施ししはじめた。

２．M&D の組織

ジャマルは，同志を募ってフランスのいくつかの都市（ヴァランス，リヨン，ニース，グルノーブル）に M&D の拠点を作り，パリにも事務所を設けたが，93年に本部をマルセーユに移転した。会員にはフランス人のほか，スペイン人，オランダ人，ロシア人などがおり，また移民労働者の側もモロッコ人だけでなく，アルジェリア人やチュニジア人なども加わって，フランスやモロッコでのボランティア活動に参加したり，拠金に協力したりする仕組みが作り上げられた。

M&D 本部で入手した資料によれば，M&D の目的は，次のとおりであるという[M&D　1996]。①出身村落の開発主体となることによって，移民が出身地での社会的地位を再発見すること。②村落開発によって帰国に際して良好な生活条件を生み出すこと。③移民とフランス人が共同プロジェクトを実施することによって，移民が受け入れ社会に統合されるのを促進すること。④フランス人と村落民との間で持続的かつ強固な結びつきを作り出すこと。⑤村落の青年とフランス人青年がプロジェクト参加によってともに職業教育と人間形成に役立たせうること。

他方，モロッコにおいても M&D の支部が首都ラバトに設立されたが，モロッコ M&D は，フランスの M&D の支部としての性格とモロッコ各地で設立された村落 NGO の連絡協議体としての性格をもっている。調査時にはラバト支部は廃止されて，スース地方の中心都市タルーダントにモロッコ本部が移転し，タリウィーン（タルーダント県），エルハウズ（マラケッシュ県），イシュレン（ワルザザート県）の３カ所に事務所が設置されていた。村落開発プロジェクトの実施にあたっては，計画段階から必ず現地の村落に NGO が設立され，M&D との契約にもとづいて技術・資金援助を受けながら，村人たちも資金を拠出し，労働に参加する。プロジェクトの完成後は，

運営に責任をもつのは現地 NGO であり，Ⅳで述べるように村落の政治や社会にも当然ながら大きなインパクトを与える。Daoud は，95年当時，50の現地 NGO があり，参加者は３万人に達していると述べているが，タルーダントでの聞き取り調査によれば現地 NGO はほぼ150に達した。

３．M&D の活動

M&D が実施しているのは，広義の村落開発関連プロジェクトであり，具体的には M&D の資料によれば下記のとおりである［M&D　1999］。

①農村電化　プロジェクト・サイトは，主として山地の僻村であるが，送電線から遠いために電化が行われていない村が多い。僻村の電化には，自家発電と太陽電池という二つの方式があるが，M&D では自家発電，それも各戸単位ではなく村落単位で発電機を備え，村落内に送電線を敷設して各戸に配電するという方法を採っている。しかも前述のように必ず村落単位の NGO を結成して，計画・工事・管理の各段階で村民が積極的に参加すること，村の全戸に通電すること，工事費の最低40％と管理費の全額を村民（都市および外国に居住する村出身者も含む）が負担すること，を原則としている。99年までに80村落を対象として45の配電網が設置された。戸数では3250, 受益者数は３万人である。

②水利事業（飲用水および潅漑用水）　サイトは，雨量が少なく，山間部にあるために村落内に井戸がなく，女性たちは遠くの水場まで水汲みに行かなければならなかった。村内に深井戸を掘ったり，水場から簡易水道を引き，給水塔や浄水装置を設けることによって飲用水を確保するプロジェクトである。ここでも水不足のなかで村民が連帯して水を確保するという考えから，各戸には配管せず村落内に共同水栓を設置して利用するという原則が採用されている。

潅漑用水については，地下水位を上昇させるために河床に堰を設置した上でポンプ場を設けたり，貯水池（地下および開架式）を建設し，村落内の圃場に水を配分するための用水路が設置される。各戸別に揚水ポンプを設置すると水位が下がってしまう危惧があるので，ここでも共同ポンプ施設の建設

が原則である。また在来方式の用水路に多かった漏水をふせぐために配水管やコンクリート水路の設置も行われた。
③識字教育　僻地という条件から公立学校まで遠かったり，悪路だったりするために，幼児や女子にとっては通学が難しく，また女性隔離の社会的習慣から女生徒は一定年齢に達すると退学する事例が多いので，女性の非識字率がきわめて高い。村内に設置された学校は，公立ではないために非正規教室（classe non-formelle）と呼ばれ，教員も指導員（animateur）と呼ばれているが，教員の給与は政府が負担し，村の NGO は校舎の建設と教室管理運営にあたるという原則が少しずつ確立されていった。
④医療　やはり僻地という条件から医師が常駐する診療所には遠いために，村の NGO の負担によって診療所を建設し，政府が給与を負担して看護師が常駐している。医師や助産婦が巡回して診療を行うほか，看護師によって衛生知識の普及，家族計画の実施指導が行われている。
⑤授産所・職業教育　村民が現金所得を得られるように絨毯や布地を織る講習を行い，山羊や羊の飼養を推進している。雌雄の仔山羊を貸与して，子供が産まれたら子供を返却するという仕組みは，絨毯の材料となる毛糸と同様に現物による小規模融資の制度であり，製品（絨毯，刺繍，乳製品など）の販売を支援する事業も行われている。医療と同様に保健や栄養に関する啓蒙活動も実施されている。
⑥その他　道路建設，モスク，図書室，ボランティア受け入れのための宿泊施設などの建設を行ったり，夏休みに林間学校を開設してフランス人やモロッコ人移民の学童・生徒を受け入れる事業，フランスからボランティア（技術指導員や労力奉仕者など）を派遣したり，モロッコから研修生をフランスに受け入れるなどの事業が実施されている。モロッコの民族舞踊団をフランスに招いて公演し，モロッコ文化をフランスに紹介するなどの事業は，狭義の村落開発に活動が限定されず，フランスとモロッコの文化交流にも活動領域が及んでいることを示すものである。

Ⅳ．プロジェクト・サイトの概要

１．アトラス山地の村落経済

訪問した４つのサイトについて述べる前に，M&D が組織した村落 NGO が点在するアトラス山地の村落経済に関して概要を述べておこう。M&D の活動拠点は，モロッコにある４つの山系のうち，**略図に示した上**（かみ）アトラス山脈の北麓と南麓，後（うしろ）アトラス山脈の北麓に集中している。年間降雨量は平均200ミリから300ミリであるが，７～８年周期で干害に襲われる。雨期は冬であるが，村落は標高1000メートルから2000メートルに散在しているので，大陸性気候で夏は40度をこえ冬は10度以下になる。生業は農業であるが，雨量と耕地が乏しいので，主穀である麦類の収量はきわめて低く，ヘクタールあたり500キログラム位しかない。オリーブのほかアーモンドなどの果樹があるが，野菜は潅漑地以外では栽培できないし，飼料が不足しているので，家畜（牛，羊，山羊，にわとり）の飼養頭数もきわめてわずかである。要するにきわめて貧しい山村であり，そのために村から多くの出稼ぎ労働者をモロッコ国内と国外に排出することにより，村の経済が維

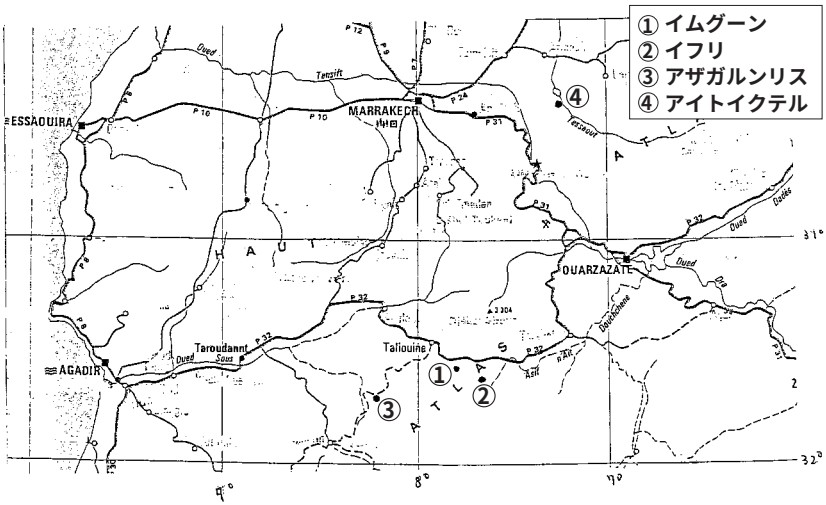

図１　プロジェクト・サイト位置図（南モロッコ）

持されてきた。村の生活の貧しさを象徴するのが，電化されず，水道もないということであった。飲用水が村内でえられない場合，井戸や泉などの水場まで時には数時間かけて水を汲みにいかなければならないが，それは燃料の薪集めとともに，女性の仕事であった。

この地方の特色は，ベルベル人の集落が多いことである。ベルベル人とは，モロッコの先住民であり，イスラームへの改宗は進んだが，独自の言語ベルベル語ほかの文化を維持している。社会組織は，父系家族集団が基本であり，いくつかの家族集団が集まって村落を形成している。村落は，男子の家長で構成される村落会（ジュマア）の自治によって運営される。

以下では，訪問した順にイムグーン，イフリ，アザガルンリス，アイトイクテルの概況について述べていきたい。

２．イムグーン

イムグーンは，タリウィーンから幹線道路を10キロ走り，未舗装道路を４キロ入った場所にある（**図１の①**）。悪路であっただけに村が僻村であることが実感できた。戸数は125世帯であるというが，村の入り口に診療所と学校（公立校）があり，まず診療所を訪問した。室内には「手を洗いましょう」というポスターや家族計画のスローガン（「少なく生んで大切に育てよう」など）がアラビア語で掲示されているが，見るからに簡易な施設であり，医療器具などはあまり見あたらなかった。

村の家並みをみまわして，まず目についたのは，石壁にめぐらされた電線であり，電線をたどりながら，発電小屋にむかった。発電機を動かすのは，日没から零時ないし零時半であり，婚礼や割礼など特別の事情があれば，燃料の実費を負担して発電時間を延長してもらうことができる。各戸にメーターが設置されているので，消費量にしたがって電気料金を支払う。通常は照明用の電灯のみであるが，パラボラアンテナを設置してテレビを受像している家もある。通電時間が一日６時間程度なので電気冷蔵庫は導入されていない。

ついで貯水池を見学し，村はずれの堰堤にむかった。堰堤といっても石と

土で傾斜した壁が築かれているだけで，雨期以外には水はまったくたまらない。それでも地下水の水位を上昇させる効果があるとのことである。

３．イフリ

イフリは，幹線道路を15キロほど走ってから，さらに10キロほど奥にあったが，舗装されているために，隔絶感はさほど大きくなかった（**図１の②**）。戸数53世帯，住民数約600人の小集落である。1993年に電化事業が終わり，95年に潅漑用ポンプが設置されたとのことである。やはりポンプ場を兼ねた発電小屋と貯水池を見学したが，取水口は干上がった川底にあり，発電とは別のジーゼルポンプで揚水する。この村では潅漑地にアーモンドがあるほか，サフラン（香料）を栽培しており，大きな現金収入源になっている。耕地の拡大さえできれば，オリーブとサフランをふやせるというので，新しい揚水ポンプ一基を設置する計画がある。

この村では，現金収入増加プロジェクトに参加しているザイナさんの家も訪問した。彼女は，絨毯織りプロジェクト（織機と毛糸を借り入れ製品を販売してもらうもの）および山羊の飼育プロジェクトに参加している。後者は，６ヶ月の仔山羊ひとつがいを現物で借り入れて肥育し，仔山羊が生まれたら返却するという仕組みであるが，従来の放牧方式に変わって集中飼育を勧めているのも特徴的である。それは山羊の乳を利用するためであり，自宅で消費することによって栄養状態を改善するとともに，チーズを販売することによって現金収入を確保するという目的をもっている。さらに放牧の場合，しばしば子供が山羊番をしなければならないが，そのために学校に通うことができない状態を改善するという目的もあるという。集中飼育の障害になるのは近くに草場がない限り，飼料の確保に時間がかかることであり，そのために飼養頭数をあまり増やすことができない。ザイナさんの家でも山羊の飼育は家の一角の山羊小屋で行っているというが，数頭を見かけただけであった。売れるほどのチーズ生産ができるとは思われず，ザイナさんと起業家のイメージを結びつけるのは難しいと感じた。

４．アザガルンリス

アザガルンリスは，ティリウィーンの町はずれから脇道にはいって南西約40キロの位置にある（**図１の③**）。はじめの25キロは６メートル幅の舗装道路であり，15キロ近く未舗装の区間が残されている。６メートル幅の舗装道路というと，この地域の幹線道路とあまり変わらない見事さであり，M&Dのプロジェクトで道路舗装ができたことにまず感心した。やがてわかったのは，同村の村長サーディク氏がタルーダント選出の議員でもあり，彼の政治力によって道路舗装が行われたらしいという事情であった。15キロ近くの未舗装道路がもつ意味は，おそらく実際に自動車で走ってみなければわからないだろう。日が高かった往路でも悪路の意味はわかったが，日没後に穴や石ころを避けながら運転することによって，村落開発における道路建設の意義をはじめて実感できたと思う。

同村は，村役場の所在地であり，週市が開かれるが，平常の戸数はわずか34世帯，人口は137人である。まず村役場に表敬訪問した後に，週市が開かれる場所を通って集落に入り，電化・飲料水計画について説明を受け，学校を見学した。この村でとくに重点を置いたのは，学校訪問である。公立校は13キロ離れた村にあるので，小さな子供や女子は通学できず，M&Dが設置した非正規教室に通学している。先生役のハフィーダ氏によれば，学童数は低学年が20名，高学年が22名であり，成人も12名が通学している。それぞれ２時間ずつを割り当てて複式授業が行われている。

ハフィーダ氏の説明ではじめてわかったのは，上述した「地域の実情に適応した授業」の具体的内容である。すなわち学校では，公立校と同様にアラビア語で授業が行われ，４年生以降はフランス語の授業もはじまる。ところが同村はベルベル人の村であり，人々はベルベル語を母語としている。どのように生徒たちの理解を可能にするか，結論を急げばベルベル語で説明をするのだという。モロッコでもベルベル語の放送はあるが，教育言語としてベルベル語は認可されていない。M&Dとモロッコ教育省との折衝が繰り返された後に，妥協点として「ベルベル語を教えるのではなく，説明用語として用いる」ことが認められたのだという。したがって先生（指導員）もまたベ

ルベル語を母語とする地元出身であり，給与は政府から補助されるが，政府や地方公共団体の職員ではない。M&D がその活動を通じて政府とベルベル人住民との関係に新しい原理を樹立しれたケースとして注目に値するであろう。

５．アイトイクテル

24日夜は，約200キロ離れたワルザザートに宿泊して，翌25日に山越えして上アトラス山脈の北麓にあるアイトイクテルに向かった（**図１の④**）。マラケシュの東60キロほどは幹線道路で，支線の山道を南に35キロほど登るまでは舗装されているが，アイトイクテルがあるアバドウ村の中心スークラルバアから村までの４キロは舗装されていない。これは村の NGO が整備した道で一車線ではあるが，ところどころに待避所が作られているし，維持状態が良いので乗用車でも楽に通れた。アマハーン氏の別荘に案内され，食事を供されながら，村の概況を聞くとともに翌日の打ち合わせを行った。

翌26日朝から上水用のポンプ場と給水塔，発電小屋，図書室，学校，M&D センターとつぎつぎに案内され，午後からは潅漑用水，第二の学校，貯水池，診療所を訪問して，アイトイクテルでの行程を終了した。施設・運営体制ともこれまでに訪れたサイトのなかではもっとも整っており，村で作成した多色刷りのパンフレットさえも用意されていた。以下，訪問時の印象をまじえながら活動状況について述べていこう。

村の世帯数は122であるが，さらに３つの集落に分かれており，標高は1000メートルを越える。雨量は300ミリを下回るというが，村にはサボテン以外に樫やネズの木の緑も見受けられ，訪れた他の３つのサイトよりも自然条件に恵まれているようだったが，村から出ている出稼ぎ労働者は142人に達しているという。NGO 結成の契機は，80年代の干害であり，水不足に苦しんだ住民が村出身の移民から集めた資金によって1993年に井戸（手こぎポンプ付き）を整備したことにあるという。それが契機となって村民全員が加入してアイトイクテル開発協会が95年に結成され，M&D グループに参加した。調査時までに実施したプロジェクトはパンフレットによれば下記のとおりで

ある［Association Ait Iktel　1999］。
①飲用水の確保。95年に日本政府の援助（草の根無償）によって深井戸からの揚水ポンプを購入し，村内の３集落に1.6キロの導水管を敷設して，共同水栓を設けた。ついで97年には飲用水プロジェクトをフランスとドイツの援助によって拡大し，周辺住民8000人に飲用水を供給できる施設を完成した。若い女性たちが水汲みという重労働から解放され，識字教育と学校通学をはじめたとパンフレットは強調しており，村内だけでなく周辺の村落にも供給していることも誇らしく述べている。
②電化。M&D の援助によって96年に電化が行われた。方式は他の事例と同様である。メルニッシーによれば，電化前にはローソク代として月に35ディルハム（約450円）かかったが，電灯代は25ディルハムで済むという。
③潅漑。2.5キロ離れた水源から用水路が引かれていたが，石積みであったために，増水すると崩壊し，また水漏れも多かった。98年に日本政府の援助によってコンクリートで固めた用水路を整備し，246ヘクタールの農地に潅漑できるようになった。99年には貯水池も完成したので，潅漑によって土地利用を多角化できるようになった。
④教育と文化。98年に識字教育のための学校（非正規教室）をフランス政府の援助によって建設し，20歳未満の女性の80%が通学できるようになった。公立学校は４キロ離れた場所にあるので，高学年になれば公立学校に通えるようになるので，低学年の補修授業と女性を対象とした識字教育が事業の中心である。低学年向けの第二の教室も開設されており，二つの施設を見学した。ベルベル語を用いて説明するという点もアザガルンリスと同様である。図書室はポンプ場の近くに設置されたが，中を訪れると，フランス語の文献とアラビア語の文献がそれぞれ300点ずつ位並べてあった。とくに児童向けの蔵書というわけではないようで，利用状況はあまり芳しくないだろうと推察した。
⑤研修センター建設。98年にフランスの援助によって建設したセンターは，職業教育や各種の研修，会合などに用いられる。コンクリートブロックではなく石積みの外壁で外見上も周辺の環境に適合しているのが特徴的である。

センターにはパソコン４台が置かれ，実技教育も実施されている。昼間だったが私たちのために特別に発電してくれ，パソコンを動かしてくれた。職業教育としては絨毯織りの実技を見せてくれたが，もともとアイトイクテルには絨毯織りの伝統がないこと，製品の販売が難しいことが問題であるという。パンフレットは，販売のためにインターネットのホームページに参加して販売を促進している点を強調している。
⑥診療所整備。村内ではなくスークラルバアにあるというので，帰りがけに立ち寄ったが，建物は75年に建設されていたが，太陽電池方式による電化を村の NGO が実現したとのことであった。診療所長と看護師が常駐し，診察は医師や助産婦の巡回時に実施されるが家族計画の研修への参加者は700名に上り，伝統的助産婦の再研修にも協力しているとのことであった。

Ⅳ．おわりに

Ⅱのフランスでの文献調査とⅢのモロッコでの現地調査の成果をどのように結びつけて私なりの結論を導くが，以下ではフランスでの M&D，モロッコでの M&D，村での M&D という３つのレベルに分けて考察してみよう。

１．フランス社会と M&D

フランスにおける移民研究のなかでも，M&D の活動はきわめて独自の素材を提示している。一般にフランスにおけるマグレブ移民は，単身出稼ぎ型からはじまって，家族定着型，第二・第三世代型という変化をたどり，移民の行動様式や受け入れ社会への適応形態が変化していく。当初はフランス社会に適応するために言語や生活様式の修得につとめ，生活に追われて目立たないように暮らすという消極的な対応をしていた移民たちが，家族を呼び寄せたり，フランス育ちやフランス生まれの移民（第二世代）になると，アイデンティティ維持のために宗教・文化活動を行ったりしてフランス社会に対しても積極的に対応するようになっていく［宮治美江子　1993］。ジャマルの場合も，単身出稼ぎからはじめたが，労働運動を通じてフランス社会との関係を深め，モロッコ人労働者と協力しながら，出身地の村落開発のための

NGO 活動を開始することによって，モロッコ社会との絆を確立していった。フランスの開発援助を担う移民の活動という意義も大きいし，きわめて自覚的にフランス社会とモロッコ社会を結びつけようとしたところにジャマルの活動さらには M&D の独自性があるといってよいだろう。

２．モロッコの国家・社会と M&D

M&D の活動の本来の意義は，「両岸のモロッコ人」というダウードの著書のタイトルが示すように電灯と水というきわめて具体的な村人のニーズを，たまに村に帰ったときに快適に過ごしたいというやはり具体的な移民労働者のニーズと結びつけ，村落開発のプロジェクトとして具体化したことにある。

さらに M&D とモロッコの関係で注目されるのは，モロッコ法上，M&D は国際 NGO であるが，提携関係にある村落 NGO の連絡企業体としてモロッコ NGO を組織し，それが国内 NGO とみなされているということである。その点で私は，なぜモロッコ M&D がラバトからタルーダントに移転したかに大きな関心をいだいた。モロッコもまた発展途上国のひとつとして中央政府の権限が大きく，首都ラバトに情報が集中している。政府や援助供与国との折衝や，地方の村落 NGO との連絡協議のためには，ラバトに活動拠点があったほうがよいと思われるのに，プロジェクト・サイトに近いという利点はあるにしてもなぜ僻地の県庁所在地に過ぎないタルーダントにモロッコ本部を移転したか。モロッコ政府との関係のなかでも，Ⅲで述べたように非正規教室でベルベル語を使用することや，指導員の給与を受けるには，かなりタイトな現地での折衝があって，それを中央政府が承認するという過程があったはずである。国家と社会との新しい関係が模索されており，地方都市が大きな役割を担っているのではないか，と私は考えている。

Ⅲで述べたように，はじめの３つのサイトでは，フランス M&D が大きな影響力を維持しているのに対して，アイトイクテルでは村落 NGO がフランス本部からかなり自立して独自の活動を行っている。飲用水や潅漑事業で日本，フランス，ドイツなどの資金がプロジェクトで利用されたと述べた

が，そのためには，アマハーン氏などのようにかなりのノウハウとコネをもった人たちがいて，村落と外の世界を仲介することに努力したに違いない。シニカルにいえば，電化についてフランス M&D もまたアイトイクテルの村人に利用されたのだという側面があることも確かであろう。しかし，それこそ NGO によって開かれた新しい社会関係の一環として積極的に評価されるべきではなかろうか。モロッコには，約 3 万の NGO が設立されているというが，国家と社会の関係が変化しつつあることを示す指標として NGO はきわめて大きな意義をもっている［宮治一雄　1999］。M&D の事例を通じて，それが実感できたように思われた。

3．村での M&D

僻地の住民たちは，電灯や水道の利便性について十分に承知しながらも，みずからのニーズや欲求を断念することによって，昔ながらの貧困な生活を続けてきた。アイトイクテルについて述べたように，村人がみずから立ち上がり，水問題に取り組みはじめたことから，新しい地平が開かれた。他のサイトでは M&D の働きかけによって村に開発 NGO が設立され，電気，潅漑，教育と短期間の間にさまざまなプロジェクトを実現していった。メルニッシーは，伝統的なジュマアが大きな役割を演ずるとともに，従来は出席や発言ができなかった女性や青年たちが，NGO の枠組みのもとで，プロジェクトに積極的に参加していったことを強調している。市民社会の実践として村レベルの民主化を国政レベルの民主化に結びつける契機として注目しているのである。人権運動，女性運動における NGO とともに，開発 NGO が民主化における役割を担う可能性をもっていることは確かであるとしても，現実にたとえばアイトイクテルでの実践が村の民主化をもたらしているかどうかは，さらに詳細な調査なしに明言できることではない。

さらにいえば，M&D のプロジェクトもまた他の村落開発と同様に，村内の貧富の格差を拡大するという側面があることも否定できない。たとえば潅漑用水路の設置場所をどう定めるかによって，水を利用しやすい村人とそうでない村人の利害対立があったに違いない。どのように村レベルで問題の解

決にあたってきたか，住み込み調査を含む調査を行う必要があることを痛感しているが，それは次の課題としたい。

（注１）２人の著者のうち，前者はモロッコの社会学者で著書が日本語でも刊行され，現代アラブの代表的フェミニストという評価も含めて，日本でもよく知られた人である。後者は，同じモロッコの女性研究者で当初はジャーナリストとして活動しはじめたが，マグレブ三国の女性を扱った書物を含めて多くの著書を刊行し，いまや著述家としての評価も定着しているといってよい。二つの著書を比較すると，ダウード氏のほうが M&D の活動全体について手堅い記述をしているが，プロジェクト・サイトとしては上アトラス山脈の南麓と後アトラス山脈の北麓に挟まれた渓谷に位置する地方都市，タルーダントとタリウィーン周辺に関心が向けられている。他方，メルニッシー氏は，上アトラス山脈北麓の村，アイトイクテルを中心として村落レベルの村人の活動や村の生活変化について詳しく述べるとともに，独自の考察を加えている。ダウード氏には別に M&D に関する論文もあるが［Daoud　1996］），前述の著書と重複しているので，本稿ではとくに利用しなかった。

参考文献

Association Ait Iktel du Développement, *Ait Iktel-Haut Atlas,* Ait Iktel, 1999, 4p.

Association Migrations et Développement, *Note de présentation* 1996, Marseille, 6p (dactylo).

Association Migrations et Développement, *Sans titre,* Marseille, 1999, 6 p (dactylo).

Chattou, Zoubir, *Migration marocaine en Europe—Le Paradoxe des itinéraires.* Paris, l'Harmattan, 1998, 254p.

Daoud, Zakya, "Immigrés marocains : l'implications villageoises", *An-*

nuaire de l'Afrique du Nord, Paris, CNRS, 1996. pp. 843–852.

Daoud, Zakya, *Marocains des Deux Rives.* Paris, Les Editions de l'Atelier, 1997, 171p.

Mernissi, Fatema, *Les Aït Débrouille du Haut Atlas.* Editions Fennec, Casablanca, 1997, 153p.

宮治一雄「モロッコの政治改革――構造調整と社会運動」，宮治一雄編『中東諸国の構造調整と社会問題』，日本国際問題研究所，1999年：87－102。

宮治美江子「移住の人類学序説」，『応用社会学研究』（東京国際大学），第３号，1993年：１－26。